

ゆる佛教經驗否あらゆる宗教經驗が一つになる。然もそれらは同一でありつゝ差別し、差別しつゝ同一である。(然しこれは理同事別といふ意味でなく、事々無碍といふ意味である。)佛心と凡心とが無碍の一體を成立せしめてゐるといふのが、著者の主張であり、こゝからすべて見られてゐる。般若の論理、即非の論理もこれをいふためである。

とまれ本書はたゞに眞宗學の研究者に對してのみ示唆に富むといふ種類の書ではない。廣く一般に推賞する所以である。

(S)

宗教的世界

大友 芳雄著

獨逸純正哲學の研鑽に精進せられつゝ、一面常に眞宗の教義に深い關心を有たれ、直接親鸞聖人の教に生きられる著者が、この三四年間、折にふれて書かれた隨筆集であつて、收めるところ十六篇。或は宗教に於ける傳統と創造の關係を論じ、或は「生きていること」は絶對者の慈悲に包まれて生かされることであると述べ、釋尊が尼連禪河のほとりて村嬢から牛乳の供養を受けられた話から、食衣住の宗教的受容を語られ、或は「み民われ」の自覺は眞實の意味に於いて、眞宗教徒の自覺と一致する事を明かにし、地獄一定のすみかと確信する所に開かれる無碍の大道を述べて、この道こそ安んじて行き得る道である事を述べられる。著者は序文の中に、諸篇の底深く貫き流れてゐるのは、

宗教の立場から人生の正しい觀方や生き方を明かにするといふ事であると述べて居られるが、其の趣旨はよく達せられてゐる。取り上げられた問題は必ずしも嶄新ではないが非常時局を深く體認して居られる著者は、問題を常に自身の上に取つて清新な感覺を以つて解釋して居られる。著者は先に知識講座の一篇として「宗教の話」を公にせられ本書と共に一年に二部の書を刊行せられた。我々は著者の筆硯いよ／＼健かならん事を念ずると共に、この次には著者の専門に關する本格的勞作にお目にかゝりたいと念願してやまぬ。終りに本書所收の篇目を掲げておかう。「宗教に於ける傳統の意義」、「生かされて生きている」、「惡の問題」、「怨みを超ゆる」、「食の宗教味」、「謙ひのこゝろ」、「福と禍」、「無底の慈悲」、「唯心の道」、「隨順の境地」、「持ち味」、「母性愛と觀音菩薩」、「心の眼」、「苦難を超ゆる」、「み民われの自覺と菩薩精神」、「安んじて行ず」。(B六、二〇二頁。臺圖六拾錢。大阪市西區新町南通三ノ四八、敝文館)(松)

南方佛教の様態

龍山 章眞著

南方圏の政治經濟建設はその基礎に強靱なる文化工作を持たねばならぬが、それには先づ南方圏の過去と現在とを通じてそれ自體の文化一般を適確に認識しなければならぬ。南方佛教に對しても亦當然深き關心が寄せられてゐるが、著者は既にその成果を提示した。著者がこゝに南方佛教の「様態」といふのはそ

の過去と現状を指す。南方と總稱するもその地域は廣く民族は雑多であり且その交流は甚だ盛んであつたのみならず最近までは凡て歐人の支配下にあつた爲、單に佛教に關してのみ之を取り上げて問題複雑であり、種々の「様態」を呈してゐるからである。著者はその様態を明快に四類に分類した。即ち(一)

南方上座部の佛教(二)クメル民族の佛教(三)安南の佛教(四)南海佛教である。この中、(一)(四)は會つて行はれ現在はその遺跡のみを存するものであり、(三)は儒・道二教との混淆佛教である故、支那佛教の系列に屬し、南方佛教としては比較的重要なでない。そこで(二)南方上座部の佛教が當面の問題の中心となり、随つて著者もそこに力を注ぎ、又そこから説き初めてゐる。著者は先づその歴史を述べその資料と遺跡とに言及し、次いでその教理と現状を述べてその精神の注意すべき諸點を挙げ、之に對しての批判と要望の一端を漏らして、日本佛教徒として南方佛教への理解と同感とを示してゐる。南方上座部の佛教は長い歴史を背景として現に生きてゐるから著者はその一篇に全篇の大半を費して克明に論じてゐる。次に現存する佛教として安南の混成佛教の歴史と現状が述べられてゐるが、吾々の關心はむしろクメル佛教と南海佛教の記述に移つて行くのは當然である。前者に於て吾々は有名なアンコールの遺跡の前に立つことが出来るし、後者に於てはジャワのポロブドゥル大塔を仰ぎ見るのみならず、從來餘り知られなかつたスマトラの遺跡にも接することが出来る。是等を述べるに當つて著者は鮮麗な寫眞のみならず、地圖や見取圖を用意する周到さである。又、

南海佛教の歴史に就てはシュリーギジャヤ佛教王國に關する一章のあることも忘れてはならない。義淨の記錄する室利佛逝國として佛教史家の一部には親しまれてはゐるが、總括的知識として一般には開放されてゐなかつたからである。

卷末には地圖と索引とが附せられてゐるが、それにも増して吾々を利するのは主要文獻目錄である。それは著者が本書の執筆に當つて出會つた文獻を録すると言つてゐるが、しかもその多量にして廣範圍なるは二十六頁を占めて單に佛教關係のみならず、廣く一般文化にも及んで東西古今の書を蒐録してゐる。一體、文獻の自在なる驅使は著者の獨壇場であるが、全篇を通じて見られる文獻の適切なる引用は此の書の成立が著者の精密な研究と用意を背景としてゐることを證して餘りあるものである。此の文獻目錄に加へて、本文の序説中に含まれる現代印度人の手になる佛教研究書目や第二章第一節の巴利語典籍の項を持ち得ることは、佛教を學ばんとする何人をも利すること至極であらう。

用紙・印刷・圖版は鮮明、校正亦嚴密である。

東京・弘文堂A5本文三二頁索引・文獻目錄五二頁

(昭一八・一・一九河野記)

「支那佛教史研究」(北魏篇)

塚本 善隆著

佛教史の本質は、その佛教の行はれた深い地盤の上に於ての